

総合人間科学 化 学

1 構 成 員

	平成21年3月31日現在
教授	1人
准教授	1人
講師（うち病院籍）	0人（ 0人）
助教（うち病院籍）	0人（ 0人）
助手（うち病院籍）	0人（ 0人）
特任教員（特任教授，特任准教授，特任助教を含む）	0人
医員	0人
研修医	0人
特任研究員	0人
大学院学生（うち他講座から）	0人（ 0人）
研究生	0人
外国人客員研究員	0人
技術職員（教務職員を含む）	2人
その他（技術補佐員等）	0人
合 計	4人

2 教員の異動状況

藤本 忠蔵（教授）（H14. 4. 1～現職）

松島 芳隆（准教授）（H15. 4. 1～H19. 3. 31 助教授；H19. 4. 1～現職）

3 研究業績

数字は小数2位まで。

	平成20年度
(1) 原著論文数（うち邦文のもの）	1編（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	2.91
(2) 論文形式のプロシーディングズ数	0編
(3) 総説数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0
(4) 著書数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
(5) 症例報告数（うち邦文のもの）	0編（ 0編）
そのインパクトファクターの合計	0

(1) 原著論文（当該教室所属の者に下線）

A. 筆頭著者が浜松医科大学の当該教室に所属していたもの

1. Y. Matsushima and J. Kino, New Concise Route to 2-Amino-3-hydroxycycloalkanecarboxylic Acids by Imidate-Mediated Intramolecular Conjugate Addition. Eur. J. Org. Chem. 1619-1624, 2009

インパクトファクターの小計 [2.91]

4 特許等の出願状況

	平成20年度
特許取得数（出願中含む）	0件

5 医学研究費取得状況

	平成20年度
(1) 文部科学省科学研究費	0件 (0万円)
(2) 厚生科学研究費	0件 (0万円)
(3) 他政府機関による研究助成	0件 (0万円)
(4) 財団助成金	0件 (0万円)
(5) 受託研究または共同研究	0件 (0万円)
(6) 奨学寄附金その他（民間より）	0件 (0万円)

7 学会活動

	国際学会	国内学会
(1) 特別講演・招待講演回数	0件	0件
(2) シンポジウム発表数	0件	0件
(3) 学会座長回数	0件	0件
(4) 学会開催回数	0件	0件
(5) 学会役員等回数	0件	3件
(6) 一般演題発表数	0件	

(3) 役職についている国際・国内学会名とその役割

藤本忠蔵 日本分析化学会中部支部次期支部長

藤本忠蔵 クロマトグラフィー科学会評議員

藤本忠蔵 日本分析化学会電気泳動分析研究懇談会評議員

8 学術雑誌の編集への貢献

	国内	外国
学術雑誌編集数（レフリー数は除く）	0件	0件

(3) 国内外の英文雑誌のレフリー

J. Chromatogr. Sci.(USA) 1

Electrophoresis(Germany) 1

J.Chromatogr.A(The Netherlands) 2
 Biosci. Biotechnol. Biochem.(Japan) 1
 Tetrahedron(England) 1

9 共同研究の実施状況

	平成20年度
(1) 国際共同研究	0件
(2) 国内共同研究	0件
(3) 学内共同研究	2件

(3) 学内共同研究

福田敦夫教授（生理学第一） 大脳皮質移動細胞のGABA_A受容体反応に対する細胞外に存在するGABAとTaurineの影響

間賀田泰寛教授（光量子医学研究センター） PETイメージングへの応用を指向した有用物質の合成化学的研究

10 産学共同研究

	平成20年度
産学共同研究	0件

12 研究プロジェクト及びこの期間中の研究成果概要

1. キャピラリー電気泳動法のための固定相の開発

溶融石英キャピラリーを用いる電気泳動法の種々の分離様式に対応するための新規の固定相及び擬似固定相の開発を行った。中空キャピラリーエレクトロクロマトグラフィーでは相比の向上を図るために種々のエッチングを検討し、従来の処理法では達成できなかった大きな表面積を有する固定相を合成することに成功した。また、動電クロマトグラフィーの擬似固定相としてブタジエン系ポリマーを合成し、高い安定性とこれまでにない分離選択性を見出した。さらに、シリカ及び有機ポリマー系モノリスを内径0.53 mmの分離カラム内に合成することができ、従来よりも分離性能の向上が達成できた。

2. 抗生物質に見られるデオキシアミノ糖など有用物質の合成法の開発

アミノ糖は生理活性物質に広く存在するが、中でもデオキシアミノ糖は、エリスロマイシンに代表されるマクロリド系抗生物質、グリコペプチド系のバンコマイシン、アントラサイクリン系抗腫瘍抗生物質であるダウノマイシンなど、数多くの医薬品においても活性発現に必須な構造単位であることが知られている。我々は抗生物質の活性発現機構の解明や、合成ルート解明のツールとして、また医薬創製に向けた応用研究を目的としたデオキシアミノ糖の必要性に鑑み、その要求に応えるべく汎用性の高い効率的な新規合成法の開発を目的として研究を開始した。我々はその合成研究の過程で見いだしたトリクロロアセトイミダートを基盤とした分子内共役付加（マイケル付加）について考察を深め、アミノ糖以外の有用物質として、シクロペンタン環やシクロ

ヘキサン環を有するアミノ酸の合成に応用した（発表論文A-1を参照）。

3. PETイメージングへの応用を指向した有用物質の合成化学的研究

近年のPET（ポジトロン断層撮像法）を中心とする分子イメージングの成否はイメージングプローブの開発が非常に重要である。これまでのPETイメージング剤は製薬企業等の開発物質があり、これにポジトロン核種を導入するという形で発展して来たが、今後は合目的に化合物デザインを行い、ポジトロン核種による標識体合成をドラッグデザインの段階から視野に入れた有機化学的化合物開発を探索的に行う必要がある。本研究では本学の間賀田教授との共同研究として、有機合成的手法を基盤とした脳内ニコチン受容体 $\alpha 7$ サブタイプイメージング剤をはじめとするさまざまなPETイメージングの実用化を目標とし、いくつかの候補化合物を合成中である。